

切手に見る栽培キノコ

石川 博己

はじめに

私がキノコ切手の収集を開始したのは1974年のことでした。この年の11月に東京・帝国ホテルで「第9回国際食用きのこ会議」が開催され、これを記念してシイタケを描いた日本初のキノコ切手が発行されました(図1)。当時、

私は林野庁でキノコ行政に従事し、栽培キノコの生産奨励と消費拡大を推進していたので、この国際会議の運営にも行政担当者として参画しました。



図1 シイタケ (1974年・日本)

このことが契機となり、小学生の頃からの趣味であった切手収集とが相俟って、キノコ切手の収集家となった次第です。

以来、半世紀近い収集歴でコレクションが充実し、キノコと切手に纏わる多数の話題やエピソードも誕生しました。これらのことは2013年に出版した拙著『キノコ切手の博物館』(日本郵趣出版)で詳しく紹介しておりますが、その後も新たな話題や発見が生まれています。これからご紹介するキノコ切手の話題は、海外で発行された日本人には馴染みの深い栽培キノコを描いた切手に関することです。

栽培キノコの切手誕生

世界で最初にキノコ切手が発行されたのは1958年のことで、キノコ好きで知られるスラヴ系民族のルーマニアからでした。切手に描かれたキノコは発行当初から野生キノコが主体で、現在でもその趨勢に変化はありません。

それでは人工栽培されたキノコの切手が世界で初めて発行されたのは何時かといえますと1974年のことで、何と日本からでした。それが冒頭の原木栽培によるシイタケの切手です(図1)。次いで同年に台湾からエノキタケの容器栽培による切手が発行されました(図2)。



図2 エノキタケ (1974年・台湾)

この台湾の切手はポリプロピレン製らしい瓶を使った栽培の様子を描いたもので、容器栽培の切手としては現在でも唯一の存在で貴重なものです。

発行ブームの栽培キノコ切手

その後、10数年前からはシイタケやエノキタケだけではなく、ヒラタケ、エリンギ、マイタケ、ブナシメジなど、日本のスーパーで見かける馴染みの深い栽培キノコを描いた切手が世



マイタケ (1999年・北朝鮮)



シイタケ (2016年・ソロモン諸島)



エリンギ (2016年・オーストリア)



エノキタケ (2018年・ギニア)
左が栽培種、右が野生種



ヒラタケ (2019年・モルディブ)



フナシメジ (2019年・ニジェール)



タモギタケ (2001年・タイ)



ツクリタケ/マッシュルーム (2015年・ガーナ)

図3

世界各国から次々と発行されるようになりました(図3)。推測ですが、海外でのヘルシーな日本食ブームを反映して、栽培キノコに対する人気も高まって切手の発行ブームに繋がったものと思われます。

このようなブームは、若輩の頃に仕事で栽培

キノコに携わっていた私には懐かしく、とても嬉しいことでした。ですから私は、低コレステロールや低カロリーを謳い文句に、健康食品である栽培キノコのPRのため、「食卓を賑わすキノコたち」と題した切手作品を各地で展示してきました。

疑惑のキノコ切手

さて、上記の栽培キノコの切手を詳細に見ていると、中には何とも不思議といえますか、理解しかねない疑惑を抱く切手が幾つか存在しています。その顕著な例をご紹介しますと、2014年にアフリカのモザンビークが発行したマイタケを描いた切手のことです(図4)。このマイタケの形状を見るとコンパクトに整っていて、如何にも容器栽培によるものであると推測できます。このことが私には疑惑となっているのです。



図4 マイタケ (2014年・モザンビーク)

その理由は、①各種キノコ図鑑によればマイタケの分布は北半球の温帯以北とされ、「世界きのこ大図鑑」の日本語版でもアフリカ大陸には分布せずと図示されていること、②モザンビークの緯度が南緯15~20度で熱帯雨林気候に属しているため、野生のマイタケの生息には適していないと思われること、③モザンビークにはマイタケを栽培しての食文化があるのかとの疑問があること、④仮に食文化があったとしても、マイタケを栽培するノウハウ(菌類の扱いに対する知識、栽培用の種菌や空調施設の具備等)を有しているのかとの疑問があることなどです。③と④については、私が現地を確認してはいない推測ですけど、余りにも都合よく作

られた切手を目にした疑惑です。

疑惑切手存在の背景

こうした疑惑の切手を発行する背景には国内経済の低迷が要因となっているのです。モザンビークに限らずアフリカ諸国の多くはGDPの数値が低く、下から数えた方が早いほどの地位なのです。そこで経済政策の一環として、キノコを含むあらゆるテーマの切手を頻繁かつ大量に発行し、これを海外の収集家向けに大量に輸出して外貨獲得を図っているのです。切手1枚当たりの販売単価が安いので、必然的に乱発による膨大な輸出量で補うしかありません。

加えて、切手のデザインも粗雑になりがちな面があります。また、人気の高いテーマの花とか蝶、キノコなどの切手は、売らんがためには手段を選ばずで、現実とは懸け離れたデザインに仕立てて発行する手法もとっているのです。件のモザンビークの切手についても、日本産の栽培マイタケの写真を引用したデザインであろうと思えてなりません。

おわりに

しかしながら、たとえ上記のような目く付きの疑惑切手であったとしても、オフィシャル・イッシュウならば私はコレクションに加えています。それは、このようなマテリアルを新たな話題として、多方面に情報提供できる使い道が私にはあるからです。キノコ切手を遊ぶマニアたる所以です。